

平成29年度 第1回山梨県考古博物館協議会議事録

- 1 日 時 平成29年7月26日(水) 13:30～15:50
- 2 場 所 考古博物館(風土記の丘研修センター)
- 3 出席者 (敬称略)
 - (委員) 石川博、井出薫子、小林千澄、笹本森雄、田代孝、丹沢公彦、丹沢良治、辻村和人、中村京子、長澤宏昌、古屋美代、堀内秀樹、堀内正基、前田友也、渡邊富孝 15名
 - (事務局) 萩原館長、一瀬副館長、村石文化財指導監、高野次長、小林学芸課長、学術文化財課員1名、総務課員3名

4 会議次第

- (1) 開会
- (2) 委嘱状・任命状交付
- (3) 委員紹介
- (4) 事務局職員等紹介
- (5) 議事
- (6) その他
- (7) 閉会

5 会議に付した事案の件名

- (1) 平成28年度考古博物館事業実績について
- (2) 平成29年度考古博物館経過・予定事業について
- (3) 考古博物館利用状況について
- (4) 委員提言に対する対応・検討状況について
- (5) その他

6 議事の概要

(委員) 協議会資料は協議会当日ではなく、前もって委員に届けてもらいたい。

(事務局) 次回以降は事前に配布する形をとりたい。

(委員) 博物館や美術館を運営していくのは大変な事業だと思う。考古学という古いものを古いものそのまま展示するのではなく、“今”を表現しないと人は来てくれない。考古学と“今”を結びつけながら運営をしていくべき。今の人達が何を求め、何に魅力を感じるのか考えながら運営をしてほしい。今の人達が考古博物館に行って体験してみたいと思うようなイベントを実施してほしい。

(事務局) 現代と考古学を結びつけていきたい。青銅器型のチョコ作りのイベントは大成功しており、チョコ作りの中で青銅鏡を知ってもらうことができた。

(委員) 食の流行りは変わるものなので、その時代時代の素材を考慮しながらイベントを考えていくべき。時代背景を見ながら、何を人が好むのか、求めるのか意識してほしい。平日は高齢者、土日は子供向きというようにすみわけをするとおもしろいのでは。

(事務局) におい・味・色などの感性に訴える研究が増えているのでそれらに着目してイベントなどを実践していきたい。現代人の立場から古代の色やにおいや味を並べてみようという試みを考えてはいるが、いかに実践していくのが難しい。考古博物館として知恵を出していきたい。

(委員) 甲府市とアイオワ州のデモイン市が姉妹都市交流をしていて、中学生がこちらに来る時に訪問先の候補として考古博物館を提案しているが、英語での説明がないので連れて行っても説明ができないと聞いている。実際そのような状況なのか。

(事務局) 英語版のパンフレットはすでに作成してある。韓国語と中国語も必要だということと検討を進めている。

(委員) もし英語版のパンフレットがないのであれば、中高生からパンフや展示の英訳の公募をしてはどうかと考えていた。それをきっかけに中高生の集客につながると考える。各学校にいる ALT の先生も巻き込めるとし、子ども達が展示の一部を担い、誇りを持ってもらえる仕組みができれば良い。

(事務局) 考古学専門の英語を訳すのが中高生にとっては難しいのではないかと。実現可能か検討したい。

(委員) 縄文は世界的にみても貴重。問題は見せ方だと思う。外国人にも見せやすくするというのは時間も手間もかかると思うが、様々なアイデアを集めてほしい。

(委員) 専門用語が多いので子供達に翻訳させるのは正直厳しい。考古博物館を多く利用してもらいたいという趣旨には賛成。

(委員) 考古博物館で行っているイベントがほぼ周知されていないことが問題。色々なイベントを行っているにも関わらず、ごく一部の人にしか知られていない。美術館・博物館・文学館は SNS 上で反応が多い。他館との認知度に違いがある。考古博物館は公式の Facebook

やTwitterがない。SNSを活用しながら上手に発信していけば広報が充実するのではないか。展示会や発刊物があれば他館からはお知らせが来るが考古からはない。外に対する発信力が不足していると感じる。

(委員)『お肌のキレイな縄文土器』のイベントは考古学的にも非常に斬新でとても良かったが、触ることはできなかったのか。

(事務局)全て重要文化財だったので難しかった。

(委員)山梨でしかできない特別展だったと思う。ただ、五感で感じるができなかったのは残念。

(事務局)観覧者数がここ数年固定化してしまっているので、新規のお客さんの獲得が必要。発信力の弱さなどで欠陥があると考えている。

(委員)SNSを使って情報を発信して、来館したお客さんにアイキャッチ(土器を実際に見るなど)をしてもらって新規観覧者を増やすべき。

(委員)色々な企画展に形容詞を使った題名を考えてほしい。魅力を感じるような、夢のあるような題名が良い。ネーミングは重要。

(事務局)前回の館長講座の受講者数減少を取り戻すために、今回の館長講座は武田信玄を取り入れてキャッチーなものにした。受講者数も増加し、成功している状況。展示については力を入れていて、良い資料を多くの人に見てもらおうと実施しているが、多くの人に見てもらわないと良さはわかってもらえない。いかに良さを伝えていくのが考古博物館の課題。

(委員)固定客に対してご褒美をあげるシステムを取り入れてはどうか。イベント・講座・体験などで単位制を導入する。かなりの来館者を見込めると思う。近隣の県も巻き込めればさらに良いが、まずは県内から考えてほしい。

(委員)各学校の考古博物館の利用について、広報活動は例年通りだったのか。

(事務局)例年通り。職員が手分けして案内等を配布した。あとは学校への訪問。東京23区(中央区、荒川区、新宿区)や小平市、武蔵野市を回り、教育委員会の指導主事などに訪問依頼を行った。新規開拓については今年度も引き続き検討していきたい。

(事務局) 県外の学校の見学が減ってしまった。リニア見学センターなど他に見学する施設が増えたことや県外の学校が山梨県に来た際に宿泊していた施設の老朽化や閉鎖、生徒数の減少などが原因として考えられる。県外の学校へのPRが功を奏し、来館数が増加しているが、逆に県内の学校が減少している。

(委員) 県内の学校が弱いという話があったが心配。家の倉庫を片付けていたら子どもが来館した際の縄文時代の火起こし器や勾玉、縄文時代のかごが出てきた。大人になった子どもがこれらのものを捨てずにとっておいた。これこそが考古博物館の使命だと思う。2倍も3倍もお客さんが増えるということが大事なのではなく、子供がその時に何を思い、どういう気持ちになったかということが大事。本来の考古博物館の意味は、現状で十分であると考えている。地道な努力をぜひ続けていただきたい。小中学生の親子だけではなく、孫と一緒に来られるイベント作りなども良い。

(委員) 5、6年生はだいぶ厳しいと思う。各学校の校長先生の「この学年にこの学習を入れたい」という発言は非常に大きな力を持つ。各学年の担任を呼んで、年間の予定にこれを入れたらどうか、という風に学校長が動くとう学校が訪問しやすい。各市町村の校長会にて来年度のイベントなどの計画を教えてもらえると学校としても予定に組み込みやすいので検討してほしい。

(委員) 考古博物館は「観光」・「おもてなし」の施設として機能すべき。土器に触れたりするような体験が少ないと感じる。小中高生向けの体験型のものを増やしてほしい。他館との関連性を持って協力しながら運営をしてほしい。子ども達が様々な体験して、いかに自分のものになっているかということが大切。今までの学習の要素とは変わってきていると感じる。

(事務局) 高校生・大学生が少ない。若い人をどのくらい引きつけるか、ということを中心に考えている。新しい試みにも挑戦していきたい。他館と協力し合えばさらに良い状況になると思う。

(委員) 出前事業はないのか

(事務局) 学校へ行って出前支援(土器作りなど)を埋蔵文化財センターが対応している。

(委員) 各担当者が何を担当しているのか、リストを作ってもらいたい。

(事務局) 問い合わせれば対応は可能だが、リストを作成するのは難しい。また、

埋蔵文化財センターのHPで事業内容は確認できる。

(委員) 展示が若干小中学校生には難しいと思う。展示物数を減らすなどして、もっと1つ1つの時代のポイントがわかりやすいものにしたらどうか。展示のメリハリ感が必要。県内と県外の来館者数が1:1なのはもったいない。小中学生にとっては常設展がすべて。印象に残るような展示をお願いしたい。

(事務局) たくさん説明があれば良いというわけではないと思うので検討したい。展示物にもストーリー性を持たせていきたい。子供達や観覧者の感受性を高められるものが必要。学校の数も固定化してしまっているのを改善したい。県内の学校がバスを借りると県外に出て行ってしまふことが多いので、県内の館を巡ってもらうツアーなどを検討したい。子ども達が考古博物館に来て、ただ展示物を見るだけではなく達成感などを感じてもらいたいという趣旨のもと、イベントを考えている。小中学生が自分達でテーマを選んで研究してもらうわたしたちの研究室は、だんだん参加者も増え中身も濃くなっている。

(委員) 考古の目玉の土器の横に“履歴書”があり、わかりやすく説明できていると思う。そういったものを増やしていきたい。各時代で目玉になるものを作ってほしい。

(委員) レプリカを並べても子どもはあまり興味を持たないので実物を見る体験・感動を伝えてほしい。

(事務局) 実物を用意できないものについてはレプリカを作る意味がある。何年かに1度は本物が里帰りするイベントを検討したい。

(委員) 「偽物はだめ・本物を見たい・できれば触りたい」のがお客さんの本音。

(委員) たくさんイベントを実施しており大変な苦勞があると思う。勾玉作りなどの体験型のものが良い。体験型のもはイベント時だけではなく常時実施して頂きたい。様々な面から学習ができるように、展示の仕方なども工夫してほしい。

(事務局) 南アルプス市は教育委員会が熱心で子ども達と一緒に来て説明などをしてくれる。タイトルなどについてはご意見を踏まえながら善処したい。先日リニア見学センターで七夕のイベントを実施した。秋にはリニア見学センターの人が当館へ来てイベントを実施する予定。他の施設との情報共有を図っていきたい。

(事務局) 水族館や動物園は対象物が動くので子ども達の興味を引く。考古博物館の遺物

は動かないが、それを作った人達は動いていたので、それを表現できるような工夫をしていかなければならない。新しい世界と古い世界の共存。ちょっとした工夫で入館者数の増加が見込める。知恵をしばって展示をしていきたい。

(委員) 会議の前に考古博物館を見学させていただいたが、入口が寂しい。館に入ってみると多くの子ども達がいる、様々な企画をしていて、日頃の職員の努力に感心させられた。ただ、中のにぎやかさに比べて外の静けさが残念だった。入りやすくわくわくするような玄関の雰囲気作りをしていただきたい。IC を降りてすぐに見える大きな看板が有効に使えると思う。目をひくような宣伝・インパクトのあるキャッチコピーを考えてほしい。

(委員) 県立博物館は学芸員が頑張っていて研究と展示がマッチしている。研究が展示に活かされていて、研究紀要も書いている。考古博物館でも研究紀要などを書いているのか。そのことについての説明がないのでわからない。

(事務局) 研究紀要は毎年、埋蔵文化財センターと共同で書いている。実際研究をしないと展示ができないので、様々な取り組みを行っている。

(委員) それを上手く公開してほしい。博物館はHP で研究紀要をダウンロードできる仕組みになっている。

(事務局) 研究が可能な環境作りをすすめていきたい。それぞれの得意分野を展示に活かしている。玄関の環境もさらに整えていきたい。

(委員) ここが考古博物館の玄関だと示すモニュメントなどを置いてみてはどうか。

(事務局) 「Art of Jomon」というグループの作品を飾ったことはある。

(委員) 看板などの文字は目につきにくいので、一瞬でわかるような立体のものがあると良い。立地がとても良いので目立たせないともったいない。

(事務局) モニュメントを置くのは可能だと思う。検討していく。

以 上